

**日本と世界における自転車利用環境の現状比較と今後の展望**  
**Present conditions comparison of the bicycle use environment**  
**in Japan and the world, and the future prospects**

1K06A235

指導教員 主査 岡浩一朗先生

宮口和也

副査 中村好男先生

**【序論】**

自転車は日本国内において通勤・通学手段、買い物、レジャーなど身近で手軽な交通手段として広く普及しており、また近年の環境問題への注目や健康志向の高まりにより環境負荷の小さい健康的な交通手段として見直され、より利用ニーズが高まってきている。しかしその一方で自転車による交通事故の増加や、自転車利用者のマナーの悪さ、放置自転車などが大きな社会問題になっている。この研究の目的は、日本における自転車利用環境と自転車利用環境先進国との現状を比較し、今後の日本における自転車の交通手段としての位置づけや、自転車利用環境のよりよいあり方を考察することである。

**【本論】**

自転車利用を促進する主なメリットは「経済面」、「健康面」、「時間」、「環境面」の4つに分類できるが、それぞれのメリットを受ける「個人」、「企業」、「国」などのそれぞれの主体により程度や内容に大きな差が生じるため、自転車施策を進める上では、各主体がどのようなメリットを受けるのかを明確にした上でそれぞれの計画を打ち立てることが大変重要である。

現在日本国内においては歩道、車道に歩行者、自転車、自動車が混在している状態にあり、国際的に見て自転車走行環境整備の現状も計画も他の自転車利用先進国に比べ大きく出遅れている。日本においては国土交通省が中心となり自転車走行環境の整備のために「緊急対策の実施」

「推進体制の確立」、「計画的な整備の推進」の3つに分類し自転車走行環境の整備を行っており、平成20年にはこれらの整備の実施に先駆けて全国にモデル地区を選定し事業を展開している。しかし、自転車利用に関する具体的で明確な数値目標がない、自転車走行空間のネットワーク性の欠如などの計画面、自転車専用道の対面走行などの構造面などまだまだ多くの課題が残されている。また、自転車による交通事故の増加に伴い、警察庁は自転車に関する道路交通法の一部改正等の処置も取っている。

それに対して自転車利用先進国であるオランダ、ドイツ、デンマーク、フランス、アメリカなどでは具体的な自転車利用に関する数値目標を持った計画を行っており、特にアムステルダム、ミュンスター、コペンハーゲンなどでは自転車が重要な交通手段と1つとして扱われており、公共交通機関とうまく連携をとり広大な自転車走行空間のネットワークを形成している。

**【日本における自転車走行環境の今後の展望】**

様々な切り口のある自転車利用の促進の問題であるが、今後の日本においてはインフラ整備だけでなく自転車利用に関する明確で具体的な自転車利用促進計画、自転車専用の走行空間にこだわらず自転車利用ネットワークの形成を第一に考えたインフラ整備、自転車の右側通行、歩道通行の危険性を自転車利用者に理解してもらい自転車利用者のモラルを向上させる広報活動、の3つをキーワードにした、継続的な自転

車利用環境整備の促進活動が必要になってくる  
だろう。